



床屋政談



川崎ゆきお

「政権というのは変わるのでしょうか」

「政治権力のことかな」

「じゃ、権力を握る人が変わるという意味で」

「政治の世界はよく知らないが、更新というのがある。これは刷新でもいい」

「余計に難しくなりました」

「要は目先を変えて、新鮮な気分で、またスタートしようと言うことかな」

「その政権がだめなので、政権交代ですね」

「そうじゃなく、天災や悪いことが起こったりしたあとなど、よくあったらしいよ。昔は。まあ、権力者って言っても、大した力はなかったんだらうねえ。だから、失政じゃなくても変わったようですよ」

「いつの話ですか」

「中世です」

「それは古い。今とは違うでしょ」

「気分替えですよ。年号を変えたりも」

「そんなことで、世の中が良くなりますか」

「ならない。しかし、今までのことは忘れて、新たな気持ちで、またやろうという仕切り直しの儀式ですよ」

「遠い世界の話なので、よく分かりません」

「遷都がある」

「また、難しい」

「いや、行きつけの飲み屋を変えることが、遷都のようなものですよ」

「それは何ですか」

「その店がだめなんじゃない。特に不都合はないが、別の店へ行くことにする」

「そんな必要はないでしょ」

「何かを切り替えたいときにね、そう言うことをたまにします。飲み屋でも喫茶店でも、スーパーでも何でもいい」

「はあ、そんな必要はないと思いますが、それで良くなるとか、暮らしやすくなるのなら、別ですが、そんなことをしたぐらいでは何ともならないでしょ」

「ところがそうじゃない。気が新たになる。験直しだよ」

「験直しですか」

「縁起直しとも言う」

「それって、気の持ち方だけで、改革性はないですよ」

「どの政権だってそうだ。永遠に続かない。長く続いたとしても、実際に動かしているのは別の連中だったりする」

「あ、はい」

「生活もそうだ。暮らしぶりもそうだ。三十年前、五十年前とはすっかり違っているだろ。これはもっと昔なら、百年か二百年は、似たような暮らしだったかもしれないけど、やはり着るも

のも、食べるものも、仕事も、変化している」

「はい」

「だから政権は変わって当然と」

「験直しでね。今までのことは忘れて、仕切り直しだよ」

「手品みたいですよ」

「ものの言い方を変えるだけで、違ってくるようなものだよ。やってることは同じだし。ただ、少し意味が新鮮なだけ」

「はい」

「これはお清めとお祓いなんだ」

「そっちへ行きますか」

「自然とやっているんだよ。そう言うことを」

「呪術の世界じゃありませんか」

「そこは太古から変わっていないねえ。言い方が違うだけで。政見放送を聞いていると、あれは祝詞だねえ」

「呪文のようなものですか」

「ああ、ごによごによと」

了